夢野久作宛、佐左木俊郎書簡——翻刻と解題——

大鷹涼子

一、杉山文庫所蔵書簡について

杉山文庫には杉山龍丸氏により福岡県立図書館に寄託された資料群が収められている。その所蔵資料は、杉山龍丸氏の蔵書とともに、杉山茂丸及び夢野久作関係資料より構成されている。それらを目録化したものが、福岡県立図書館編『杉山文庫総目録稿』（一九九〇年）である。[1]

さて、杉山文庫には書簡が多数所蔵されており、そのうち夢野久作から他の人物へ送られた書簡七十五通は『夢野久作著作集6 随筆・歌・書簡』（二〇〇一年七月）に収録された。これは便箋複写簿（昭和六年、昭和七年頃のもの二冊）に残されたもの五十三通と、現物を翻刻したものである。便箋複写簿のものは、大下宇陀児、水谷準、城昌幸の三名の他は茂丸や他の家族、能楽関係者に宛てたものが中心である。現物で残っているものは、茂丸宛が二通と神田豊穂宛の下書き一通、森綾子宛一通、宛先不明が一通、他十七通は全て妻のクラに宛てられたものである。

夢野久作宛（妻、クラ宛のもの含む）の書簡は、「夢野久作宛手紙綴」として「文学関係者」（1～4）、「友人・知人関係」「能関係者」「家族関係」「親類関係」と大きく分類されているが、差出人については未整理のまま保管されている。

今回「文学関係者」ファイルの中より、佐左木俊郎から夢野久作に宛てられた書簡、全六通を翻刻することにした。[2]書簡には①～⑥の番号を付す。なお、①～⑤までは新潮社用箋、⑥は原稿用紙[3]が使用されている。

佐左木俊郎は明治三十三年四月十四日に生まれた。大正十三年八月、『文章倶楽部』に『首を失つた蜻蛉』を投稿し、当選。編集責任者であった加藤武雄に目をかけられ、私設秘書となる。その後才能を認められ、新潮社社員となってからも、「熊の出る開墾地」（『文章倶楽部』昭和四年四月）「黒い地帯」（『新潮』昭和五年一月。『新興芸術派叢書』の一冊としても刊行）などを書き、農民文学で注目されている。農民文芸会会員である。また大正十四年六月には、復刊された『文芸戦線』にも参加。昭和四年十月

には加藤と中村武羅夫が中心となった「十三人倶楽部」にも名を連ねている。同年、『文学時代』の編集を担当し、積極的に探偵小説作家を起用、自らも探偵小説を手がけた。『新青年』にも長篇「恐怖城」などの作品を寄稿している。雑誌を編集すると同時に、小説も数多く発表した人物である。

久作との関係としていえば、『文学時代』や『新作探偵小説全集』の編集者と作家という間柄でもあった。『文学時代』は昭和四年五月から昭和七年七月まで新潮社から発行された雑誌である。編集兼発行者は、新潮社社長の佐藤義亮であるが、実際の編集は創刊から終刊まで、佐左木が担当していた。『新作探偵小説全集』[4]は昭和七年四月の甲賀三郎『姿なき怪盗』を皮切りに、全十巻で刊行されている。この全集は甲賀三郎が企画し、佐左木が編集に当たったものである。[5]久作の『暗黒公使（ダークニスター）』（第八回配本）は全集第九巻として昭和八年一月十五日に刊行されている。なお、この全集には『探偵クラブ』という、雑誌というには規模が小さいが、趣向を凝らした付録が付けられた。

ここに翻刻する書簡は、これらの編集に関する内容である。

二、翻刻と解題

①　拝啓

貴稿「一足お先きへ」第三回まで、たしかに拝受いたしました。有難う御座いました。

それから、貴下の「怪夢」と云ふ小説を頂いてありますが、これに就いては、申訳をいたさねばならないことがあります。

小生は、貴下のペンネエムだけを知つてゐて、御本名を存じませんでした。あのときの依頼状だけを自分で書き、貴下の御住所を、「新青年」から訊いて手紙を発送してくれるやう頼んで置いたのですが、後に、「杉山泰道」と云ふ人から、原稿を書いて送ると云ふ手紙を貰つたときには、実は、意外な気がしてゐたのです。貴下が、杉山さんであらうとは夢にも思ひませんでしたし、貴下が福岡においでにならうとも思つてゐなかつたからです。

そこで、その「杉山泰道」と云ふ人からの原稿は、開封をせず、机の上に置いたのですが、今度、「一足お先きへ」の第一回分を受取りましたとき、初めてわかつて、赤面もし、新年号へ載掲の出来なかつたことを残念に思つたりいたしました。何卒、おゆるし下さい。

そして「怪夢」は、「一足お先きへ」が載り終つてから出させて頂き度く思ひます。

先は、御挨拶旁々　おわびまで草々

一月二十七日　　佐左木俊郎

杉山泰道様

＊＊＊

①は昭和六年一月二十七日の書簡である。

「一足お先に」は『文学時代』の昭和六年の二月号から四月号に

連載された。佐左木の署名がなされている十二月二十日付け（発信年不明。昭和五年か）の原稿依頼状（印刷文書。『文学時代』規格のものであろう）があるのだが、この書状を受けて、久作より「一足お先に」が送付されたのだろうか。[6]「怪夢」に関してだが、久作の日記を見れば、昭和五年十一月十一日の項には「様々の仕事堆積して、日記怠る。此日、「豫感」五十五枚書上ぐ。文芸時代の注文三十枚突破。新に一文を起稿す」とあり、同月十六日には「「悪夢」の原稿書き」と記録されている。日記文中の「文芸時代」は「文学時代」の間違いで、「悪夢」は後の「怪夢」のことと思われる。「日記怠る」とあるように、昭和五年九月三十日から十月十七日までの日記は空欄、三日おいて二十一日から二十七日までは歌のみの記述、二十八日から十一月十日までは再び空欄である。日記には記録されておらず、佐左木からの依頼状は現存しないが、この空白の期間内に、『文学時代』から最初の注文があり、久作は「怪夢」を編集部に送ったのだと思われる。

「怪夢」は六つの掌篇の総称として付された題であり、「工場」「空中」「街路」「病院」の四篇は昭和六年十月号の『文学時代』に発表された。残りの二作は『探偵クラブ』に掲載されている。

なお『文学時代』には、昭和七年四月「焦点を合せる」、同年七月「狂人は笑ふ」（「青ネクタイ」「崑崙茶」の二篇）が掲載されている。[7]

② 貴稿「怪夢」は取あへず御返送申し上げます。その六十枚のお作は、唯今直ぐは頂きかねます。三ヶ月連載のが終りますれば、中一ヶ月を置いて、六月号に「怪夢」を頂き度いのですが、三四月間を置いてからですと、又、六十枚位のを二ヶ月に亘つて頂いてもいいと思ひます。その点をお含みの上、貴下のよろしいようお送り下さい。三十枚前後のものなら、当分の間、一ヶ月置き位に頂いても結構です。

貴下の方に長いものの御希望があれば、少し休んで置いて載せたいと思ひます。よろしく。

千枚のものは、近々中に、社長を説いて見ます。多分出版するだらうと思ひますが、話が少しでも具体的に進むまで、貴稿は送らずに置いて下さい。出来るだけ骨を折つて見ます。

御推察申しあげるところ、貴下はお寺にお住ひかと存じますが、私はお寺と云ふものに非常に憧れを抱いてゐます。仏像や木魚や香炉や、クラシックな憧れの世界です。若し貴下がお寺にお住ひでしたら、何時か遊びに行かして頂きます。

先は、お礼旁々右御挨拶まで。

二月十八日　　佐左木俊郎

杉山泰道様

＊＊＊

②は昭和六年二月十八日の書簡である。

「三ヶ月の連載」は、①の書簡に登場した「一足お先に」のことである。「怪夢」返送の後、先に記したように、結局『文学時代』十月号に掲載された。「千枚のもの」とは後の『ドグラ・マグラ』のことである。①の書簡に返信した際、久作は「狂人」稿について持ちかけてみたのであろう。②の書簡の裏面には、久作の自筆で「狂人解放」の梗概がメモ書きされている。これは佐左木への返信の下書きかと思われる。

③　拝啓

その後御無沙汰いたしてゐます。お身体は如何ですか。

何時かお話のありました貴下の書下し長篇小説、社長にまですすめて置きましたところ、出版の意志があり、梗概を頂いたのでしたが、今度は出版部の方から、梗概だけでなく、実物を拝見させて頂き度き旨を言つて来ました。多分それで、決定することと存じますから、実物の方を、至急にお送り下さいまし。多分、新潮社の方へ決定することと存じます。若し万一に、新潮社の方へ決定しませんでしたら、又、他を奔走して見ます。

それから、貴下の入院中に、奥様から又贈物を受けましたが、ああ云ふことは、私としては本当に困ります。今後、ああ云ふことは、絶体（ママ）にお止め下さいますやう願ひます。

お礼を申し上げずに、斯んなことを申上げては失礼かも知れませんが、私としては、本当に心苦しいのですから、何卒御察し下さい。

先は取りあへず右まで草々

五月六日　　敬具

佐左木俊郎

杉山泰道様

御侍史

＊＊＊

③は昭和六年五月六日の書簡である。②で触れられている「千枚のもの」、つまりここでは「書下し長篇小説」の梗概を受け取ったことが書かれている。

④　拝啓

御無沙汰いたしてゐます。

貴稿「キチガヒ地獄」たしかに拝受いたしました。

偖、唯今、新潮社では、新作探偵小説集の計企中にて、貴下のものも、その中に加へ度く存じます。併し、一冊六百枚の見当にて、七百枚位までは我慢出来るのですが、千枚からですと、どうしようもありません。それで、この千枚はこのままにして置いて、この秋までに六百枚のものを別に書いて頂くか、それともこの千七十枚を六百枚位に削つて頂くか、どちらかです。これにつき、

大至急御返事を下さい。別に六百枚のものをお書きになるやうでしたら、これは、このままお預りして置いて、次の機会に出版いたしますやう骨を折ります。併し、新しく書くよりも、これをお直しになつて、六百枚位までにいたしますやうでしたら、至急御返送申し上げます。

稿料の方の条件といたしましては、一枚を二円として、千二百円までは、本が売れても売れないでもお払ひいたし、若し、一割の印税にして千二百円を越えるほど本が売れますれば、印税に直します。社では、一枚の稿料が四五円に当るほど、売りたい計企ですが、これは、出して見ないではわかりません。兎に角、二円以上の稿料としてやつて見て頂き度いのです。これに就いては至急御返事を下さい。二十三日頃までに。

尚、短篇（三十枚以内のもの）が出来ましたら、雑誌のためにお送り下さい。

僕はこの夏を、家族伴れで北海道へ行きます。十三日に東京を出発。家族は北海道へ置いて、僕だけは二十頃に帰郷します。

若しよろしかつたら、この夏を、僕の家で、六百枚の探偵小説をやりませんか。僕もこの夏中に、六百枚を仕上げる予定です。僕の家は相当広いですから、よろしかつたら、遠慮なくおいで下さい。今年の夏は、一人で暮すのですから。

先は右まで草々

敬具

佐左木俊郎

夢野久作様

＊＊＊

④は昭和六年の夏前（五月八日以降）に送られた書簡である。ここで初めて『新作探偵小説全集』が企画されたことが書かれている。

この頃、佐左木の家は、世田谷祖師谷にあった。

久作には「キチガヒ地獄」と同題名の小説があるが、これとはまた別物であろう。中篇の「キチガヒ地獄」は昭和七年十一月『改造』に発表されている。この書簡に見られる「キチガイ地獄」は先の書簡②③で言及された「千枚のもの」「書下し長篇小説」と同一のものを指している。

日付は不明であるが、この後同社編集者の奥村五十嵐からも久作宛に書簡が送られている。④の書簡到着後、久作は佐左木に返事を出し、「キチガイ地獄」はそのままにしておいて、別に六百枚を書くことを伝えたようである。奥村の手紙には、佐左木が旅行からまだ帰ってこないので取りあえず手紙を出したことや、六百枚の小説について久作の提示した材料で差支えないということ、また短篇小説を落手したことなどが書かれている。

なお、六百枚の小説は後、『暗黒公使』として刊行される。

⑤　拝啓

その後は全く失礼いたしてゐます。

新作長篇探偵小説も、そろそろ作品が揃ひ始めましたので、近々中に予告広告を発表することになるのですが、就きましては、貴下の作の挿絵を、山六郎君にお願ひいたさうと思ふのですが、御異存が御座いませんでせうか。折返し御一報のほど、お待ちいたします。

尚、予告にあたり、お作の梗概が必要なのですが、大略の梗概を一枚半（六百字まで。―五百五六十字から）にて、お書き下さつて、至急にお送り下さいませんか。急ぎ立て済みませんが出来るだけ早くお送り下さい。

先は右要用のみ。

十七日　　佐左木俊郎

夢野久作様

＊＊＊

⑤の書簡は、発信月が不明であるが、昭和七年の前半のものであろうか。

挿絵について久作は了承の返事を出したのであろう、実際『暗黒公使』の本文の挿絵は山六郎が、そして外函の装幀は松野一雄が担当している。

久作の書いた梗概が掲載されている広告が存在するのか、それとも広告を打つ際、編集側が大略を摑む為必要だったのかは分からないが、『文学時代』昭和七年四月号には折り込み両面広告の中に、梗概とは言い難いが各作品の紹介がなされている。

ここでの『暗黒公使』の紹介文はこのようなものである。

「死線の間に変幻出没して、互に他国の秘密をスパイせんとする人々の姿を描けるもの。主人公たる暗黒大使（ママ）の神出鬼没の活躍は、読者の胸をとどろかせるだらう。」

また参考までに、昭和八年三月二十三日の東京朝日新聞に掲載された広告を示しておく。

「戦慄すべき米国間諜団帝都に現はる　見よ怪奇変幻無類／探偵小説の圧巻出づ！／これは探偵小説であると同時に秘められる近代外交史の半面である。大曲馬団を組織して東京に来り日本の機密を探る米国間諜団、夫を間諜団に奪はれその美貌を狙はれる若き夫人　侠骨活躍の陸軍大尉等／戦前早くも勝利の鍵を握らんとする卍巴のスパイ戦は壮烈痛烈怪奇に展開して素晴しく面白い！／世界を跨にかけて出没するスパイ暗黒公使の正体を見よ」

⑥　拝啓

お手紙を有難う御座いました。貴稿「森下雨村氏の作品に就いて」も落手いたしました。お多忙のところを早速にお書き下さいまして寔に有難う御座いました。私からは、何時も何時も、電報などにて失礼申上げてをりますことを、茲に深くお詫び申して置きます。

偖、今度は、寔に立派な画帳を下さいまして、本当に嬉しく、衷心より厚くお礼を申上げます。私は、面倒臭がりであり、無精

者であり、年も若いのに、何故か書画骨董刀剣などに気を引かれ、何かといろいろ蒐めたりしてゐますので、貴重な画帳、本当に嬉しく存じました。御指定の題字記入の場所には、北原白秋氏が隣人なものですから、白秋氏に雀の歌を書いて貰はうと思つてゐます。日本一の雀の画家と、日本一の雀の詩人と、それこそ天下一品、日本一の雀の画帳が出来上ることです。尚、この画帳に関係を持つ三氏が、何れも九州出身の芸術家であることも、面白い偶然です。貴兄の記念品として、私の書斎に、永久に愛蔵いたします。

それから、これはもつと早く御相談申し上げないといけなかつたのですが、私の筆不精から、勝手にお取計ひをいたし、先日も「森下雨村氏の作品に就いて」電報を差上げたやうな次第なのですが、私達は、探偵小説が、文壇の片隅に置かれてゐることを快しとすることが出来ず、探偵小説家の倶楽部をつくつて、文壇の中央へ押出るの意気込みでゐるのです。そして先づ、小さなパンフレット様の雑誌を出し、これを機関として、探偵小説の隆盛を計らうと云ふのですが、丁度、新潮社の全集を機縁として、紙代、印刷代、その他の雑費を、新潮社から寄附して貰ひ、江戸川乱歩、森下雨村、大下宇陀児、横溝正史、夢野久作、水谷準、甲賀三郎、橋本五郎、浜尾四郎、佐左木俊郎の十人を編輯同人とし、その他、吾々の友人で探偵小説を書いてゐる人全部を倶楽部員として、探偵小説家倶楽部が生れ、「探偵クラブ」が月刊されることになつたのです。貴兄にも、一応相談を申し上げてからにするのが本当でしたが、私が倶楽部員と新潮社との間に立つて奔走した関係から、貴兄には無断で、貴兄を編輯同人に加へたわけです。何卒そのこと御承知下さい。そして、当分のところ、奥村五十嵐君を助手にして、私が「探偵クラブ」を編輯することになり、編輯同人は原稿料なしの原稿を書かなければいけないわけです。併し、何うぞ貴兄のお力をおかし下さい。

新潮社の新作探偵小説全集の第一回は、近く甲賀三郎氏の分を出します。そのとき同時に「探偵クラブ」の第一巻第一号が出ます。貴兄の「暗黒公使」も今組版中です。「暗黒公使」は何度まで「公使」にその間違ひを訂正いたさせます。

尚、貴兄の大長篇の方は、現在の全集が終つてから、新潮社にすすめるつもりで僕の手元に預つてあります。標題の訂正のことも拝承。全集が了つたら、探偵小説叢書の出版などもすすめて見度いと思ひます。貴兄をはじめ、小生もさうですが、水谷君や横溝君なども、相当に短篇が溜つてゐるのですから。

そのうち是非一度お目に掛り度く存じます。九州旅行も十年来の宿望ながら叶はずにゐるのですが、貴兄も、そのうち出て参りませんか。貴兄の「暗黒公使」の出版と同時に、出版記念会などやり度く、そのときには奥さんを同伴して是非お出かけ下さい。私のところへ泊つてゐて、東京と云ふところを、その郊外から傍観して見て下さい。

尚、貴兄の「暗黒公使」の印税の出るまでは少々間があるのですが、お金の入用のときには、何時でも内金を出させますから、私にまで手紙を下さいまし。

先は右まで。暫く振りにて何もかも一纏めに申し上げました。御自愛専一のほどを。

佐左木俊郎

昭和七年四月三日

夢野久作兄

＊＊＊

⑥は昭和七年四月三日の書簡である。文中にある「森下雨村氏の作品に就て」とは一九三二年四月発行の第一号に発表された「本格小説の常道」という随筆である。文中に「『暗黒公使』は何度までも「公使」にその間違ひを訂正いたさせます」とあるが、「公使」を「大使」と間違えていたのだと思われる。前掲の『文学時代』昭和七年四月号広告もそうであるが、この手紙の後の四月十一日、二十一日の東京朝日新聞に出された広告でも、「暗黒大使」と間違った題名のまま掲載されている。

なお『文学時代』には三上於菟吉、牧逸馬の全集推薦文が掲載されている。四月十一日の東京朝日新聞では、三上・牧に加え、大審院檢法学博士の尾佐竹猛、四月十八日の大阪朝日新聞には、三氏に加え、谷崎潤一郎の推薦文が見られる。

東京大阪両朝日新聞に掲載された『新作探偵小説全集』の広告文は以下のようなものである。「探偵小説界の革命!!探偵小説は新作に限る／新聞雑誌に載つたアトの出しがらでは、もう新鮮な迫力も魅力も失つて何の興味もない。本社はこゝに鑑みて「新作探偵小説全集」を企て、代表的作家十氏を総動員し、あらゆる困難と障害とを克服して、全部新作の長篇読切といふ、本邦初めての大胆且つ愉快な企図を実現した。寔にこれ本格的日本探偵小説の一大摩天楼と称すべく、探偵小説の真の愛好家諸君を狂喜せしめるを信ずる。」

しかし「新作」とは銘打っているものの、『探偵小説四十年』によれば、乱歩の作品は代作であったし、それも乱歩一人のことではなかったという。『暗黒公使』も完全に「新作」というわけではなく、実は前身があり、大正九年五月号から『黒白』に発表された「呉井嬢次」、及び同年九月号に「呉井嬢次」が改題され「贋人形」という題で連載されたものである。[6]

ところで、⑥の書簡は『探偵クラブ』が発刊された経緯について記述されており、興味深い。先に述べたように、『探偵クラブ』は新潮社から刊行された『新作探偵小説全集』の付録である。毎号、今回次回配本の作家についての随筆・評論を載せ、全集執筆者による合作小説「殺人迷路」をリレー形式で掲載するなどしていた。

『探偵クラブ』において久作が発表したのものは、第一号「本格小説の常道」、第三号「怪夢（「七本の海藻」「硝子世界」）」（一

九三二年六月)、第五号「ビルディング」(一九三二年十月)、第七号「意外な夢遊探偵(「殺人迷路」第七回)」(一九三二年一二月)、第八号「縊死体」(一九三三年一月)である。

『新作探偵小説全集』の最終配本は、昭和八年四月に刊行された、佐左木俊郎の『狼群』である。この執筆中、佐左木は同年三月十三日、三十二歳の若さで死去している。『狼群』は、その後を同編集者の奥村五十嵐が継ぎ、完成させたものである。『探偵クラブ』最終号では佐左木俊郎の追悼ページを組んでおり、乱歩以下九名が文章を寄せている。また『新潮』五月号では加藤武雄がその死を悼み、「断絃記—佐左木俊郎君のこと—」を、翌六月号では川端康成が、文芸時評のほとんどの紙幅を用い、佐左木に哀悼の意を表している。

『探偵クラブ』最終号の編集後記には、この全集企画の後、雑誌として独立する予定だったのだが、断念せざるを得なかったことが書かれている。奥村五十嵐の本業、『日の出』編集が多忙だったためである。⑥の書簡に見受けられる、佐左木の熱意が果たされなかったのは、甚だ残念なことであった。

三、『ドグラ・マグラ』出版史の一考察

久作の日記は明治四十三年、四十四年、大正元年、大正十三年、十五年、昭和二年、三年、四年、五年、十年の十年間分のみ現存しているのだが、昭和六年から九年という最も作品を発表した時期の日記が失われている。その空白期間の作家活動を埋めるものとして、佐左木俊郎の書簡は重要なものと言える。

佐左木の書簡を通して見ると、昭和六、七年、『文学時代』や『新作探偵小説全集』及び『探偵クラブ』の折衝と同時に、『ドグラ・マグラ』の出版へ向けて、久作が佐左木に対し働きかけていたことが分かる。以下まとめてみると、②では「千枚のもの」について、近々社長まで話を進めてみるが、原稿は送らないようにといった旨が述べられ、③は「書下し長編小説」の梗概を久作から受け取り、今度は原稿の実物を送ってくれという内容である。④ではその長編小説「キチガイ地獄」を受けとったことが書かれている。⑥には「貴下の大長編」の「標題の訂正」を承知したとあるが、ここで「キチガイ地獄」から『ドグラ・マグラ』という題に変更したのであろう。昭和八年、佐左木は亡くなるのだが、そのため『ドグラ・マグラ』の件も頓挫してしまったのではなかろうか。ところで注目すべき点は、昭和六、七年に「狂人もの」が集中していることであろう。「一足お先に」「怪夢」「狂人は笑う」「キチガイ地獄」など『ドグラ・マグラ』に通ずるモチーフが胚胎された作品が、この時期立て続けに発表されているということは、久作の興味が『ドグラ・マグラ』出版への熱意を中心に、「狂人もの」へ向いていたことを表しているだろう。

今回、この佐左木俊郎書簡により、昭和六年から七年にかけて一度新潮社へ原稿を送っていたことが判明したのだが、それ以前にも『ドグラ・マグラ』は度々編集者宛てに送付されている。

一度目は大正十五年のことである。八月二十一日の久作の日記には「狂人の解放治療迭に書き上げる千百余枚。徳蔵君小包を包んでくれて、東京博文館森下岩太郎氏宛送る。」とある。この時の経緯については、森下雨村が久作の死後、回想しているので引用したいと思う。[9]

「昨年「ドグラマグラ」の出版記念の席で、初めて夢野久作の正体を突きとめた次第であつた。(中略)肩巾のひろいがつしりした夢野君が、初対面の挨拶の後から、

「ドグラマグラは十年前にあなたのお手許へ差出した旧作です」

といつた時には、僕は「へえ」と答へたきりしばらく言葉もなかつたものだ。一千枚の長篇、いはんや「ドグラマグラ」なんて特異な題名だから、十年前でも一度読んだものなら記憶のどこかにある筈だが、とんと思ひ出せないのだ。が、話してゐる中に、川田功君から丁重な批評を添へて返してもらつたといふので、ハヽアと僕は手を打つた。たしかに!それが夢野君たつたかどうかさへももう忘れてゐたが、僕が「新青年」編輯時代に千枚近い創作を受取り、当時、博文館の買ひため原稿の整理係りをやつてゐた川田功君に廻して読んでもらつて、送り返したことがある。当時川田君から読後感を聞いたやうにも思ふが、何しろ千枚といふ原稿で雑誌では問題にならず、上の空で聞き流して送り返してもらつたやうに記憶する。」

回想時点の大正十五年ではまだ『ドグラ・マグラ』という題名はついていなかったのだが、確かに原稿は森下の手に渡り、川田功を経由して久作の手許に戻ったようである。なお川田功の書簡は五通現存しており、久作に小説の表現についてアドバイスすると共に、森下と原稿について話し合った内容を伝えている。

二度目の投稿は、『新青年』編輯部の水谷準に宛てて行われた。昭和五年一月十一日の日記に書かれているように、「狂人」稿は「ドグラ・マグラ」と題名を改められ送り出された。この時のことについては水谷準が座談会で発言している。[10]『新青年』に戦せてくれという依頼で原稿が送られてきたのだが、千二百枚は雑誌で扱いきれず、殆ど読まずに棚の上に置いたままだったらしい。

最終的には能楽関係者である喜多實に、春秋社の神田豊穂[11]を紹介してもらい、昭和十年松柏館書店(春秋社の別名)より『ドグラ・マグラ』は刊行された。しかし、それ以前にも出版しようと奔走していた久作の姿が、書簡や関係者の回想などから窺える。如何に『ドグラ・マグラ』に執着していたかを表すものであろう。また、神田親子の書簡も杉山文庫には残されており、『ドグラ・マグラ』の編集、出版の経緯を知る手がかりとして注目に価する。

なお『ドグラ・マグラ』制作にあたり、何度も改稿を繰り返し書かれたことは、久作の日記などから窺い知ることができるのだが、杉山文庫にはその証拠となる相当量の草稿が残されており、これらの検証を進めてゆく必要がある。

今回の翻刻掲載にあたり、御子息、佐々木久郎氏より御快諾をいただき、また杉山満丸氏の御了解を得ました。謹んで感謝申し上げます。

■註釈

(1)『杉山文庫総目録稿』は福岡県立図書館郷土資料課内でのみ閲覧可能であるが、夢野久作資料に関しては、一九九四年に開催された「夢野久作展」の図録である『夢野久作　快人Q作ランド』で目録一覧を見ることが出来る。ただし自筆原稿についてはミスなのか、表記されていない原稿群が大量に存在する。夢野久作の自筆原稿のみのリストは一部間違いがあるものの、三池健一「郷土資料の内容」(『ふるさとの自然と歴史』第二一四号。一九八九年十月)の中で紹介されている。

(2) 新漢字旧仮名で統一した。

(3)「SASAKI TOSHIO」と名前の入った専用原稿用紙。「俊郎」の読みは「としろう」であるが、原稿用紙では「としお」となっている。

(4) 第三巻・甲賀三郎『姿なき怪盗』(一九三二年四月)／第八巻・森下雨村『白骨の処女』(同年五月)／第二巻・大下宇陀児『奇蹟の扉』(同年六月)／第十巻・横溝正史『呪いの塔』(同年八月)／第七巻・水谷準『獣人の獄』(同年十月)／第一巻・江戸川乱歩『蟲』(同年十一月)／第五巻・橋本五郎『疑問の三』(同年十二月)／第九巻・夢野久作『暗黒公使』(一九三三年一月)／第六巻・浜尾四郎『鉄鎖殺人事件』(同年三月)／第四巻・佐左木俊郎『狼群』(同年四月)

(5) 江戸川乱歩『探偵小説四十年』(桃源社、昭和三十六年)、「新潮社「新作探偵小説全集」」の項より。

(6) もう一通、二月二十日付けの『文学時代』原稿依頼状(発信年不明)が現存している。『文学時代』の刊行期など時期的なものを鑑みれば、昭和七年のものと推察される。これを受けて久作から「焦点を合せる」が送られたのだろう。

(7) 佐左木は、「焦点を合せる」と同号に探偵小説「密会所綺譚」を、「狂人は笑ふ」と同号に現代小説「街の誘蛾灯」を掲載している。

(8)『黒白』のバックナンバー一部未発見のため、現在まで「呉非娥次」「贋人形」共、翻刻されたことはない。西原和海氏は大正十一年一月までの全二十一回連載か、としている。

(9) 森下雨村「惜、辞なし」(『月刊探偵』一九三六年五月。『夢野久作の世界』(沖積舎、一九九一)所収。

(10) 大下宇陀児・水谷準・土岐雄三座談会「二人の鬼才を偲ぶ」(『別冊宝石78号　久生十蘭・夢野久作読本』一九五八年七月)

(11) 春秋社は喜多流の謡本を出版していた。

(おおたか　りょうこ　岡山大学大学院文学研究科)